

16. 満州国時代の歯科医人の活躍について (第2報) 敗戦後引揚げの苦労 ——特に福島秀策先生について——

(株) モリタ製作所 長谷川 俊夫

敗戦後1年経過した昭和21年(1946年)9月、満州国東北地区の在留の人達は殆んど帰国された。その後も残留された人々は、後始末のための留用か、あるいは技術徴用された人達であった。

この1年間、前半はソ連兵の掠奪と暴行、そして男狩りに怯え、ソ連兵が引揚げると、代りに八路軍が入り、住み家は徴発され、着のみ着のままで放り出されたが、とにかく、中国軍と八路軍がアメリカの仲介によって、1年後に引揚げが許されたのは幸であった。

ハルピン日本人会長であった福島秀策先生は、同胞の大部分を故国に帰した時は、恐らくほっとしながら感無量であったに違いない。と同時に、未だ残留の人々、更に奥地から引揚げて来るであろう同胞のために、日僑遣送民会が結成され、福島先生は衛生部長として医療関係の仕事を担当された。その後、八路軍は中共軍として成長し、やがて中華人民共和国の成立、中ソ不可侵条約の締結と朝鮮戦争の勃発等、世情は目まぐるしく移り変った。この間、残留日本人は殆んど忘れられたも同然で、当時、四等国といわれた日本政府は何等打つ術もなかったのである。

そのため、約4年間、ハルピンと日本との糸はぶつとりと切れたのである。連絡の糸を結びたいと必死に方策をたてられたが何等の応答も無かった。そこで、赤十字病院の歯学部部長であった小畑蕃先生は、赤十字を通じ手紙を出され、連絡の糸を見つけようとされた。その甲斐あって、何通かのうちの一通が福島先生の手が届いた。実に4年振りの第一信であった。

この暗い年月、福島先生はどのような生活を送っていたのか、当時の先生の手紙を大切に保存されていた福島輝子未亡人に心よく見せて戴き、その一部をご好意に甘えて発表させて戴き、

偉大なる国土、福島先生を偲びたいと思う。

先生の手紙には、ご家族の安否から先生の日常生活の有様、夫人、お子さんに対する愛情の深さ、教育、そして四等国に落ちた日本の将来等、細々と訓されている。読む者の胸を打つものがある。先生は、キタイスカヤの診療所に勤務されていたが、筆舌に尽し難い心労があったことが窺える。だが、小畑先生からの、日本は挙げて福島先生の帰りを待つという言葉に、どれ程感激され、勇気づけられたことであろうと思う。

その後、昭和26年、第2回の引揚げに、同居の杉谷氏が帰国されたが、先生は第3回の引揚げの選にも漏れられた。だが、先生は絶望されなかった。実は仁術を実行され、人々から評判の良かった先生は、皆から慕われなかなか手放されられなかったであろう。その当時の輝子夫人のやり切れない、寂しい気持は想像するに余りある。

そして、遂に時が来た。昭和28年7月、ハルピンをたたれ、瀋陽(奉天)、天津を経て8月、舞鶴に上陸、敗戦後実に8年目にしてやっと故国の土を踏まれた。

敗戦時の引揚げは、無蓋列車に包みこまれた悲惨なものだったが、今度の引揚げは、接待所として、食物も日本風、休養も充分とれ、平和時に人を送るような極めて楽なものであったという。せめてもの慰みである。

17. 草創期の F.D.I. および萬国歯科 医学会と日本歯科界先覚者たちと の関係について

東京歯科大学 ○森山徳長 高添一郎

1) 第2回万国歯科医学会(シカゴ・1893(明治26年))は、The World Columbian Dental Congress と呼ばれ、Dental Cosmos 42巻は pp. 679~1099にわたってこの学会の記事を掲載している。

8月14日には会長講演と15人の外国代表の紹介・挨拶があり、第2日にはデンマークの Secher と日本の高山紀齊が紹介され(名誉会頭)“Dentistry and Dental Science in Japan”の題で講演